東風谷早苗と博麗霊夢とその娘

普段、気にも留めずに通り過ぎていった光景が、まったく何か違ったものに見えることがある。通学路にある建物が更地になってから、ここには何が建っていたっけ、と思い返すことができなくなったりする、そんなこともある。今日の私にとっては、それは交番の掲示板に張られた一枚のポスターだった。

「どうかしましたか？」

「あ、いえ……」

交番の前で立っていたていたおまわりさんが、じっとポスターの方を見つめていた私に気付いて声をかける。少し、不審そうにしている気がした。何も悪いことなどしていないのに、勝手に心臓がドクンと跳ね上がる。頭を下げて足早に立ち去る私の背中を、お巡りさんはじっと見つめていた。

この人を探しています、という、どこの交番にも張ってある、ありふれた尋ね人のポスター。お年寄りだったり、若い人だったり、あるいは子供だったり。私が見ていたそれは、ずっと昔に行方不明になった子供のポスターだった。もう何年も張り出されていて、紙のふちが日焼けして破れている。ずっと登下校の間、毎日視界に入っていたはずなのに、気にも留めることはなかった。

三十年も前に行方不明になった女の子。いなくなったときは六歳、まだ小学校に上がる前だった。引き延ばされたスナップ写真の中で無邪気に笑っていたその子は、どこかで見たことがあるような気がした。

私には母親が二人いる。

「お母さんってさ」

「んー？」

もちろん、厳密な意味での母親、というのは一人しかいない。その母さんは、カウンターの向こうでジャガイモの皮をむいている。夕方からの営業で出すポテトサラダの仕込みだ。

「レズなの？」

「んー……」

母さんの作ったナポリタンをフォークで巻きながら、私は皿に目を落とす。母さんは別に動じた風でもなく、何事か考え込みながらまだ熱いジャガイモの皮をむいていた。

「男子？　女子？」

「え？」

「学校でなんか言われたんでしょ」

柔和な笑みを浮かべながら、母さんは質問に質問を返す。こういうところが本当に嫌いだ。何もかも見透かされている気がする。
「男子」
「で？　どうしたの？」
「……ズボンにお茶を引っかけてやった」
給食の時間。クラスの男子が、通り際に言ってきた。お前の母ちゃんレズビアン、とか何とか。単に覚えたての言葉を使ってみたかったのだろう。担任は聞こえていなかったのか、それとも反応に困っていただけなのか、何も言う気配はなかった。腹を立てる気にもなれないが、舐められるのは沽券にかかわる。私はコップに入ったお茶を座っていたその男の子のズボンの股座に引っかけ、わざとらしく「あ、ごめん」とだけ言って自分の席に戻った。
「及第点ね」
「そう？」
「暴力に訴えるのは良くないし、かといって黙っていれば舐められる。さすがは私の娘ってところね」
どことなく得意げな顔に見えなくもない母を、私はくたっとして甘じょっぱいナポリタンを咀嚼しながら上目遣いに眺めていた。業務用のボウルの上に、皮をむかれて白くつややかなジャガイモが積み上げられていく。これも癪に触るのだが、母さんは料理が上手い。こうして芋の皮をむく手際を眺めているだけでも、なにか心安らぐような思いがする。
スパゲティだって、その気になれば歯ごたえのあるアルデンテに綺麗に乳化したソースを絡めて出すことだってできるのだ。ただ今日は、居酒屋で出すナポリタン、と言うことでわざわざ茹で置きのスパゲッティをケチャップで炒めて出している。常連のおじさんたちが「土曜日の昼に学校から帰ってきて食べる味」とか言うやつだ。私にはよくわからないが、いわゆる郷愁、というやつなのだろう。
「で？」
「何が？」
「お母さんの話」
刻んだハムの入ったナポリタンぐらいでほだされはしない。皿に残ったピーマンをつつきながら、私は追及の手を緩めない。
「んー……」
木べらでジャガイモを荒くつぶしながら、母さんにしては珍しく、言葉を選んでいた。
「たまたま、かな」

「たまたま？」
「そう。たまたまこの人となら一緒にいてもいいかな、って相手が女だっただけ」
「……ふぅん」
「だからそう……女の人が好き、とか言うのとは違うと思う。第一、他の女の人と付き合ったことないし」
「あー……はいはい。ごちそうさま」
　自分で聞いておいてなんだが、私は露骨に口元をいーっとゆがめて、会話を打ち切る意思を示す。これ以上聞いていると口の中が甘ったるくなりそうだ。
「……まあ、あんたには気ぃ使わせちゃったわね」
「気にしてない」
　どこの家庭にだって、それなりの複雑な事情というのがあるものだ。片親の家庭だって珍しくはない。普段は子供なりに気を使って、立ち入らないようにしているだけだ。今日を私をからかおうとしてきた彼自身、親の不仲を愚痴っていたことがある。何で知っているかと言えば、彼の父親がＰＴＡの会合に出たときにうちの母さんにコナをかけてきて、それを知った母親の方が店まで怒鳴り込んできたことがあるからだ。その後どうなったかって？　母さんは店を閉めて一升瓶をその母親の前に置き、何をどう丸め込んだのか朝まで酒を飲みながら二人で盛り上がっていた。厳密に言えば、朝になって起きてきた私が酔いつぶれている二人を発見した、というだけで、実際に何を話していたのか知る由はないが、そのあとそのお母さんはちょくちょくランチタイムに客として来るようになった。
　私の独白を聞いているあなたは、私の物言いが十一才という年齢にしては大人びすぎている、と思うかもしれない。それはひとえに母受け継いだ性格なのか、店に来るおじさん（とお姉さん）たちに囲まれながら成長したせいなのかはわからない。あるいは、これを書いている時には私にも子供がいるくらいの年になっていて、子供時代を回想しているだけかもしれない。その判断は読んでいるあなたに委ねよう。
　いずれにせよ、母親とその連れ合いのせいだけではないが、それなりに複雑な環境に育っていればいささか難儀な性格に育つというものだ。むしろ、そんな環境で育ったにしては素直な育ち方をしたものだと自負してもいる。
「お皿、洗うから」
「ん」

食べ終えた皿を回ってカウンターの中に回る。母さんが体をずらして流しを空けてくれる。
「今日は？」
「言ったでしょ、神楽の練習」
「あ、うん。町内会長さんによろしく言っとい て」
「ん」
「早苗も七時くらいには帰ってくるはずだから、先食べてて」
「わかった」
私がお湯を出してケチャップのついた皿を洗っている間、母さんは食材の仕込みをしながらなにやらニヤニヤと頬を緩めていた。
「何、ニヤニヤして気持ち悪い」
「んー……良いものだなって。こうして娘と台所に立つの」
「嫌味ですか」
私が一番母に似ていないのは料理の腕だ。そして大抵のことはそつなくこなす母さんが、唯一と言っていいほど苦手にしているのは、人にものを教えることだ。何をやらせるにしても「がーっと」「ばーっと」「ざくっと」「適当に」などと言ってきて、こちらが手間取っているとひったくってやってしまうので、上達しないのも当たり前だ、と心の中で言い訳しておく。
「悪くないものね」
そうぽつりと口にした時、母さんの言葉尻にほんの僅かに苦いものが混じったような気がした。私は答えずに、洗った皿を水切り籠に上げ、蛇口を閉じる。視線を上げたときは、いつもの母さんだった。
「口が悪い、手が早い、負けん気が強い。誰に似たのかしら」
「鏡、持ってくる？」
一瞬口をへの字に結んで肩をすくめると、母さんは割烹着で手をぬぐいながら相好を崩した。
「あんたの方は？　なんか言うことないの？」
「ピーマン入れすぎ」
「お子様」
「お子様ですから」
子供でいる、というのも、そう悪いことでもないのだ。いまのところ。

風呂場の窓から、酔っぱらったお客さんたちの笑い声に交じって、母さんの作る料理の匂いが流れてくる。油の中ではねるタマネギとピーマン。醤油で煮しめたゴボウの土っぽい匂い。夕方の匂

いだ。学校帰りに食べて、すでに消化されつくしたナポリタンのことを思い出すときゅうっと胃が締め付けられるように鳴った。
　そろそろ早苗さんも帰ってくる。さっさと風呂から上がろう。早苗さんの帰りが早く、店もまだ客の入りが少なければ、夕食は一緒にとることもあるが、今日は神奈人が林間学校でいない。私たち二人だけだ。
　濡れた髪のまま、鏡の前に立つ。早苗さんも、店にくるお客さんも、私と母を昔から知っている人は、みんな私が母に似てきたという。それはそうだ。けれど、私は母ではない。似ていない部分もある。料理の腕だけではない。
　私は父親を知らない。会ったこともなければ、どんな人だったのか、名前さえも知らない。生きているのか死んでいるのかも。もしかしたら外国人だったのかもしれない。私の髪の色が母と違うのは、そのせいかと思ったこともある。父親がいない代わりに、二人目の母親がいる。
　もちろん、血の繋がりはない。戸籍上ではおばに当たる。母さんから見れば姉妹ということだが、私も弟も、はなからそんな建前は信じていなかった。

　噂をすればなんとやら、だ。パジャマに着替えて脱衣所を出ると、大型スクーターのエンジンの音がした。階段を昇ってくる足音で、誰が帰って来たかわかる。
「ただいまぁ～……」
「おかえりなさい」バイク用の革ジャケットをハンガーにかけながら、彼女が帰ってくる。私のもう一人の母親。東風谷早苗。
「……早苗さん」
　まだ小さかった頃のように、さなちゃんと呼ぶのも今となっては気恥ずかしい。かといって戸籍の記載通りに早苗おばさん、というのもしっくりこない。結局は早苗さん、で最近はお茶を濁している。
「ゆーちゃんもこれからごはんですか？　もしかして待っててくれた？」
「ん、今日町内会の神楽の練習あって、遅かったし」
「じゃあごはんにしましょう。お腹すきましたよね」
　革ジャンの下に来ていた作業着を脱ぎながら、早苗さんは笑う。彼女が私を呼ぶ呼び方は、ずっと変わらない。いつまでたっても小さいこどもを

呼ぶように呼ぶ。それに引き換え、母さんのことはいつも霊夢さん、とどこか堅苦しい。
「あっためるだけだし、早苗さんもお風呂入ってきたら？」
「あー……うん。そうしましょう」
　思案しながら、早苗さんはうなずく。かすかに機械油の匂いがする。仕事から帰ってくるときの、機械油と工場の匂い。休みの日や早く帰って来た時にバイクをいじっている、エンジンオイルの匂い。四人で出かけるとき、彼女が運転する車の匂い。私は彼女の匂いが気に入っていた。好き、というほどではない。嫌いではない、くらいにしておく。私の年頃では、好悪の感情を表現するにもそれなりの機微というものがあるのだ。
　男親のいる家庭であれば、そう言うものは父親と結びついているのだろう。けれど、結局どう転んでも彼女は彼女であって、父親でも父親代わりでもない。かといって、単なる母の恋人であるというのもしっくりこない。結局私にとっては、母親がもう一人いる、と考えておくのが一番落ち着くのだ。
「霊夢は東方って知ってるか？」
「知らないわね」
　ＴＶに映したＹｏｕＴｕｂｅで、ゆっくりが喋っている。
「それ、面白いんですか？」
「全ッ然」
　私はソファの上で足を抱えたまま、振り向きもせずに答える。早苗さんはダイニングテーブルに広げて何か作業をしていたノートパソコンから顔を上げて、興味深そうに喋るゆっくりを眺めていた。学校では流行っているが、私はどうも好きになれない。まんじゅう型の生首が顔だけで喋っているような赤と黒の二人は、昔のゲームのキャラクターらしいが、その一方が自分の母親と同じ名前だとすればなおさらだ。
「ねぇ」
　ＴＶに視線を向けたまま、私は尋ねた。
「なんですか？」
「……なんで早苗さんは母さんと一緒にいるの」
　再び視線を上げた早苗さんは一瞬きょとんとした顔をして……やがて相好を崩した。
「聞きたいですか？」
「……別に、そんなでもないけど。少し気になっただっけ」
「じゃあ、ちょっと付き合ってください」

ガスコンロの上で、年季の入ったコーヒー沸かしが、こぽこぽと液体が沸騰する音とともに快い香りを立てている。
「私にもちょうだい」
「眠れなくなりますよ？」
「いいから」
早苗さんが濃いコーヒーをカップに注ぎ、砂糖とミルクを入れて渡してくれる。鈍い銀色のコーヒー沸かしは、私が物心ついたころには家にあった。私たちが生まれる前からあったのだと聞いた気がする。母さんは家でコーヒーを淹れない。お茶か紅茶だけだ。なぜかコーヒーを入れるのはいつも早苗さんだった。
オーブントースターがチン、と音を立てる。ビスケットの上でこんがりと焼き色のついたマシュマロに板チョコをひとかけら乗せると、早苗さんは内緒ですよ、と秘密めかして片目をつぶり、ひとつ私にくれた。
「……ごはんの後にこんなもの食べて」
「だから共犯者が要るんですよ」
「わたしは育ち盛りだからいいの」
とろり、ととろけたチョコとマシュマロを、甘くて濃いコーヒーと一緒に頬張ると、私はソファに戻ってゲーム機のコントローラーを手に取った。早苗さんも、砂糖だけ入れたブラックをすすりながら、ノートパソコンの前に座る。
やがてTVに映った四角い世界に、早苗さんがログインしてくる。もとは私が買ってもらったゲームだったが、あとから早苗さんも始めて、今では私の知らない赤石回路とか収穫の自動化とかをどこで調べてくるのか、組み上げては見せびらかしてくる。まったく大人げない。この人にはそういうところがある。母さんは一度ゲーム画面を見ながら「仕事で似たようなことやってんのに家でもやってんの？」と呆れかえっていた。私も大筋で同意する。
「霊夢さんの話、でしたっけ」
拠点に集まってくるクリーパーを矢で撃ちながら、早苗さんは言葉少なに難しい顔をしていた。母さんと同じ顔だ。私が彼女と何か話をするときは、決まって何か別のことをしながらだった。魚釣り。バイクの整備。読書。面と向かっては別に話す気にもならないことが、何かをしながらであれば勝手に口をついて出てくる、という方が近い。まるで口下手な父親が、気難しい年頃の子供と会話の糸口を探すような（と、私は想像する）。今日はゲームだった。
「……憧れ、だったんですよ」

コントローラーを操作しながら、私は何の気もない風を装って耳を傾けていた。
「初めて会ったとき、ものっそいケンカしたんですよ、私たち。殴り合いとかじゃないんですけど、それはもう、コテンパンに負けちゃって」
「早苗さんが？」
「ははは……」
あいまいな笑いは肯定だった。母さんが、早苗さんにしろ誰にしろ、誰かに後れを取る、などと言うことは想像もつかない。そういう人だ。
「で？」
「この人には敵わないなあって」
「何それ」
思わず苦笑が漏れる。
「マンガみたい」
「ゲームみたい、って言ってほしいですね」
顔は見えないが、声は柔らかかった。
「強くて、タフで、かっこよくて、綺麗で……今のゆーちゃんそっくりでしたよ」
「だから何それ……あっ」
話に気を取られていたら、クリーパーに畑を吹き飛ばされてしまった。
「あー……もう……」
「ふふっ。まだまだですね」

しばらく、コントローラーのボタンとキーボードのキーを叩く音だけが響いていた。
「……ねえ」
「はい？」
私は再び、画面を見たまま口を開く。
「私のお父さんって誰なの？」
どうやったら子供ができるか、というのは学校でも教わったし、本でも読んだ。イメージはよくわかないが。
母さんたちが生理で血を流しながらこの世の終わりみたいな顔をしているのを見ていると、まだ自分にそれが来ないことにほっとしてもいる。それでも、いくら仲が良いとはいえ、女だけで子供ができるわけがないことくらいは理解している。理解しているつもりだった。
「ゆーちゃんもそういうの、気になるお年頃なんですねえ」
面食らった様子もなく、早苗さんはカチカチとマウスのボタンをクリックしていた。
「年頃っていうか……その……少し、気になっただけ」
前にテレビでやっていた。女同士のカップルが、知らない男の人から精子だけを提供してもらって子供を作る、という話。私もそうやって生ま

れたのだろう、と想像はしていた。でも面と向かって聞いたことはなかった。そういうのは確か、名前が分からないように秘密にしておくものだった。テレビではそう言っていた。
「知りたいですか」
「……別に」
そう言いながら、耳のほうが勝手にそばだっていた。
「……魔法使いですよ」
「なにそれ」
自分でも仏頂面になるのが分かる。
「そういうのでごまかせる歳じゃないんだけど」
「あー……信じてもらえませんか。
「あ、体力減ってますよ」
「え？」
画面に注意を向けたときにはゾンビとスケルトンに囲まれた私はあえなく死亡し、リスポーン画面に戻っていた。
「ちぇ」
「ふふ」
話を続けるタイミングを見失ってしまった気がする。もういい時間にもなった。私はゲームからログアウトすると、早苗さんにお休みを言って歯を磨きに向かった。

静かになった。私は眠れずにいる。二段ベッドを共用している相方も今日はいない。階下の喧騒も治まり、母さんが片づけをしていた水の音も止んだ。
寂しいなら一緒に寝てあげましょうか、と言ってきた早苗さんを押しのけて、私は一人ベッドに入った。寂しいのは早苗さんでしょ、と言い返してやったら、そうなんですよー、と情けない声を漏らして抱き着いてきたので引きはがした。たった二泊三日の林間学校だというのに、もう息子と離れて寂しいらしい。神奈人は私の一つ下だ。去年私が林間学校に行っていた間、母さんはどうしていただろうか。いつも通りだった気がする。
その母さんは、静かに足音をひそめて階段を上がり、リビングを通り抜けて二人の寝室に入っていく。私は静かに、布団の中で寝返りを打つ。耳を澄ませても何の音もしない。網戸の向こうから夏の虫の声が聞こえて来るだけだ。
世の中にはいろんな家族の形があるとしても、それなりにいい年になって、子供までいる姉妹が二人、同じベッドで寝たりはしないものだと思う。二人で撮った結婚式の写真を大事に飾っていたりも。

花嫁装束の母さんと早苗さんが映った写真。この家と店を母さんたちが買う前、市営住宅に住んでいた頃にフォトブライダルの式場で撮った写真だ。リビングの隅、棚の上に他の家族写真の奥に立ててある。飾ってある写真で母さんたちだけが映っているのはこれだけで、あとは私たちの写真……生まれたばかりの頃、七五三、お祭り、幼稚園のお遊戯会、入学式……そんなどこの家にもある家族写真だ。もちろん、父親の写真はない。

私はその写真が苦手だった。普段この写真を話題にするのも避けている。機嫌の悪かった私が式場のお姉さんにサービスでもらったジュースを飲みすぎて、おむつからあふれるくらいのおしっこをしたとかいう昔話を、母さんたちが毎度毎度飽きもせずにくりかえすからだけではない。私の家は、父親と母親と子供がいて――そんな、テレビに出てくるような普通の家族ではない。頭では分かっているつもりでいても、それを改めて思い起こさせるからだ。

以前学校に講師の先生が来て、体育館で話を聞かされたことがある。男同士とか女同士で一緒に住んでいたり、結婚したり、そういう家もある、恥ずかしがる必要はない。そんな話だった。けれどそういわれると、かえって何か隠さなければいけないもののように感じてしまう。友達が来た時に、母さんたちの写真を外して伏せておいたことがある。母さんは何も言わなかったが、私のほうを見ようとしなかった。あとは売り言葉に買い言葉だった。

自分ながらいやになるが、私が母さんと一番似ているのは性格だ。私も母さんも、お世辞にも控えめな性質ではないし、言いたいことを我慢することも少ない。言いたいことがあるなら言え、言いたいことなど何もない。そんなありきたりの押し問答から始まって、私が母さんのことをくそばばあと呼んだところで早苗さんが割って入った。

「そんなふうに、呼ばないでください」

普段声を荒げることもない早苗さんが、あんな真剣な目をしているのも、私は初めて見た。叩かれるかもしれない、そう思った。

「――お母さんの、ことを」

身を竦める私に、ただ早苗さんは悲しそうにそう言った。早苗さんが「霊夢さん」ではなく、お母さん、と呼んだのもそれが初めてで、それきりだった。押し黙ったまま視線を見交わす母さんたちを見て私は理解した。早苗さんにとって、母さんがどれだけ大切な人なのか。そして、母さんにとっても。

子供としては悲しい記憶だ。自分の母親が、自分と同じくらい――あるいは、自分以上に、誰かを大切に思っているということ。血を分けた子供でも立ち入れない領域があるのだということ。明かりを消して布団の中にいると、時々こうして嫌なことを思い出す。無理にでも眠ろうとして、私はぎゅっと目を閉じる。久しぶりに母さんたちの写真のことを考えたせいで、その夜はおねしょをする夢を見た。

誓って言うが、夢を見ただけだ。

今日は朝から気分が晴れなかった。雨が降りそうで降らない、蒸し暑い空梅雨の天気のせいでもあるし、昨晩の寝つきが悪かったせいもある。おかげで少し寝坊して、慌てていたので体操服を忘れた。通学路の途中で気付いて引き返し、早苗さんが出勤するところに出くわした。

これは思春期の子供にとっては一般的な感覚だと思いたいが、朝から母親のキスシーンを見てなかなか心穏やかに一日を始められるものではない。その相手が男だろうと女だろうとだ。

早苗さんは私に気付かなかったようだが、母さんは早苗さんを見送ると私の方に向きなおり、肩を竦めた。

「……朝から何やってるのよ」

「夜だったらいいの？」

「ご近所の人目があるでしょ」

「誰も見てないわよ」

「……私が見てるんですけど」

気にした風もなく母さんは再び肩をすくめ、手に持っていた体操袋を私の方に差し出した。

「忘れてったでしょ」

「……ありがと」

途中で気が付いたからいいものの、あまり時間に余裕はなかった。口を尖らせたままもごもごと礼を言い、急ぎ足で歩き出す私に、母さんは笑顔で手を振る。

「行ってらっしゃい。気をつけてね」

そういうわけで、その日の私がどうにも精彩を欠いていたとしても責められるいわれはない。

「……今日、暑かったよね」

「……うん」

五時限めの体育が終わってグランドから昇降口へと戻る道すがら。友達から話しかけられた時も私は上の空だった。降りそうで降らない曇り空は蒸し暑く、乾いた汗と土ぼこりが髪にまとわりついてぺたぺたと気持ち悪かった。校庭から吹いてくる風は、木の葉が腐ったような、どこか生臭い匂いをしていた。

「プール、早く始まればいいのにね」

「そうだね」

私の少し前を歩いていた彼女はそこで足を止め、うわの空で頷いていた私は危うくその背中にぶつかりそうになった。勿論彼女にも名前はある。一年生の時に同じクラスになって以来、なんどか同じクラスになった。十一歳の子供にしてみ

れば長い付き合いだ。互いの家に遊びに行ったことも一度や二度ではない。だから、ここでその子のことをただ「彼女」と呼んだとしても、私が彼女に対して冷淡だったとは思わないでほしい。むしろ、その逆だ。

「……ねぇ」

そう言って、彼女は立ち止まった。他のクラスメイトも先生も教室に引き上げてしまって、体育館とプレハブ倉庫の陰になったそこには、私たちしかいなかった。校庭をぐるりと取り囲む林から、蝉の声だけが聞こえている。

「どうしたの？」

帰りのホームルームが始まっちゃう、そう言いかけた私に向きなおると彼女はじっと私を見た。いつになく真剣な目をしていたが、その奥にある感情は私には読み取れなかった。怒っているのでも、ふざけてからかっているのでもなかった。

「……分かってるんでしょ」

「何の話……？」

彼女の頬がほんのりと赤く染まっているのが分かった。声が微かに震えている。彼女は私の方に一歩踏み出す。顔が近づく。私は一歩後ろに下がる。背中に白く粉を吹いた倉庫の壁が当たる。両腕で私の体を塞ぐようにして私の前に立つと、彼女は目を伏せた。ようやく私にも、自分が置かれている状況が呑み込めかけた。マンガでたまに見る、女の子が男の子に迫られるアレだ。

自分がそんな状況に置かれることを想像したことがないわけではない。けれど、いざ自分の身に起こってみると、私はただただ混乱するばかりだった。

やめて、と言おうとして、言葉が出なかった。身をよじらせて逃げようとする私を見るその目は、少し悲しそうだった。

「だって……」

彼女を傷つけたくはなかった。彼女は友達だった。けれど。

「ゆかちゃんのお母さんだって」

母さんのことを彼女が口に出した瞬間、私の困惑はどこか怒りのようなものを帯びていた。耳がかっと熱くなった。なんで母さんの話が出てくるのか。もう少しのところで、私は彼女を付き飛ばしていたかもしれない、その時。

「ねーちゃーん！」

あっけらかんと能天気な声が、私を呼んだ。

「神奈人……？」

尻尾を振る犬のように（うちで犬を飼ったことはないので私の想像だが）弟がぱたぱたと駆け寄

ってきたときには、彼女はは何事もなかったように私から距離を置いていた。
「どしたの？」
「……何でもない」
まだ少し息が荒かった。順繰りに私たちの顔を見比べる神奈人に、私は内心の混乱を押し隠して答える。
「林間学校、今日までだっけ」
「うん」
校庭の向こう側に大型バスが停まっている。五年生が林間学校を終えて、学校まで戻ってきたのだろう。そう言えば今日だったか。
「……私、先行ってるから」
「ああ、うん」
何事もなかったように彼女が行ってしまうと、あとには私と弟だけが残された。
「……大変だったでしょ」
「何が？」
「林間学校」
「ううん、楽しかったよ」
神奈人は屈託なく笑う。その笑顔がうらやましかった。
「そう。ならよかった」

林間学校の最終夜には確か、二分の一成人式をやるはずだ。自分の生い立ちとか、名前の由来とか、そういったものを宿題で調べて、最後には親への感謝の手紙をみんなの前で読み上げてから、まとめて投函するのだ。
私去年やった時には、幾分気まずい思いをした記憶がある。他にも何人かそんな複雑な顔をしていた子がいた。片親だったり、親と離れて暮らしていたり、あるいは親の夫婦仲が悪かったり。神奈人も似たような想いをするのではと少し心配していたが、うまくやったようだ。まあ、この子のことだから心配するまでもなかったかもしれない。姉バカのつもりはないが、弟は人に好かれやすい。物事をあまり深く考えすぎない性格のせいだろう。
「それより、あんた……」
「ん？」
それよりも今は気になることがあった。
「山で何か悪いもの連れてきたんじゃないの？」
「え？　ううん、大丈夫だよ？」
「……そう」
弟が私の方に来た時、何か重たいような、冷たいようなものが一緒に来た感じがした。霊感が強い、とか何か見える、というほどではないが、私

にはそういう勘が働く時がある。具体的に何がとは言えないが、何か人間とは違うものがあるような気がするのだ。母さんや早苗さんに話しても気のせいだと一笑に付されて、実際少し後でそういう気配を感じた場所や人に近づいても何もなくなっているのだけれど。

「ならいいけど」

「あ、俺もう行くよ。一回教室に集合だって」

「うん、あとで」

鉄砲玉のように駆けだしていく弟の背中に手を振っていると、強ばっていた肩から力が抜けていくのを感じる。

そう言えば、いつの間にか自分のことを俺と呼ぶようになっていた。背も最近伸びてきて、私もそろそろ追い抜かされるかもしれない。そんなことを考えているうちに、さっきまで感じていた怒りも困惑もふっと胸の中から消えていた。

「……何よ、今日は」

「何って」

「また変な顔してる」

夜営業の仕込みをする母の向かいで、私はカウンターに頬杖をついていた。

「……お皿、貸して」

「ん」

カウンター越しに皿を受け取ると、母さんは手についたパン粉を洗うついでに皿を洗い、割烹着で手を拭った。私のおやつはその日の仕入れ、ランチがどのぐらい捌けたか、母の気分、その他もろもろの要因で決まる。

ちなみに今日はハムカツだった。間食には重すぎると思われるかもしれないが、食べ盛り育ち盛りの身としては致し方ない。早苗さんが帰ってきて夕飯にするまでは結構な時間があるのだ。それに、店で出される料理の味を確かめ、維持するという大事な役割もある。何と言っても母がつくる料理の味を世界で二番目に食べ慣れているのは私なのである。

夜営業で出されるより一足先に味わったハムカツは揚げたてでいつも通りに美味しかったが、その味も今の私にはどこか上滑りしていた。母はそんな私の様子を察してか、しばらく何も言わずにキャベツを刻んでいた。

「……今朝の話？」

「それもある」

そう言われて、ようやく自分の中で何が引っ掛かっていたのか、少し整理がついた。

「キスされそうになった。女の子に」

「……それで？」
「なにも、なかった……けど」
「嫌だったなら、嫌ってはっきり言ったほうがいいんじゃない」
　私がしばらく口ごもる間、まな板の上で包丁が小気味良く踊る音だけが響いていた。
「嫌かどうかも、よくわからなかった」
「なら、分からないって正直に言うしかないわね」
「……そんな、簡単に……」
　いつもそうだ。母さんと話をすると、世界はものすごく単純にできているように思えてくる。私がどんなに悩んでいても、母さんはその答えを最初から知っているかのように。
「……母さんはさ」
「ん？」
「なんで早苗さんとそういうことするの」
「んー？」
　切ったキャベツをざるの中に移しながら、母さんはかすかに笑う。
「好きだから、じゃ駄目？」
「……よくわからない」
「誰かと何かをしたい、と思うことがあってさ」
　仕事の手を停めないまま、母さんは続けた。
「相手も同じことをしたい、って思ってくれたら、それでいいんじゃない」
「そうなのかなぁ……」
　承服できずにいる私を、母はカウンターの向こうからにやにやと笑って眺めていた。
「何よ」
「あんたもそういう年頃なのねえ」
「……やめてよ」
「なに？　あんたもちゅーしてほしい？」
「やめてってば」
「ちっさい頃はさんざんしてあげたのに」
「きもい」
　くすくすと笑いながら、母は水を切ってざるに上げたキャベツを冷蔵庫にしまっていく。私は口を尖らせたまま、その後ろ姿を目で追っていた。
「私とあなたはさ」
「……ん」
「血のつながった親子だから仕方ないけど――そうじゃなくて、自分で選んだ相手とそう居られるなら――それでいいんじゃないの」
「もしかして私、母親にノロケ話を聞かされてますか？」
「そうなるわね」
　私の軽口を気にした風もなく、母は頷く。

「……女同士でも？」
「たまたまそういう相手が早苗だっただけ」
　母は私の方に向きなおると、肩を竦めた。昨日からずっと、こんな話ばかりしている気がする
「……詳しい話はしてあげないわよ。親子でもね」
「聞きたくないし」
　カウンターにぺたんと頬を預けて、私は横目に母さんを見る。いくら仲がいいとはいえ、これ以上親のノロケ話を聞かされるのはごめんだ。
「……ねえ」
「ん？」
「母さんと早苗さん、ずっと一緒にいるんだよね。私が生まれる前から」
「そうよ」
　私が生まれるずっと前。二人は遠いところからきて、この街で一緒に暮らし始めた。私はそう聞いていた。
「遠いところってどこなの？　……外国？」
「違うけど」
　早苗さんには実家があって、親戚があって（年始に年賀状がくるくらいだが）――けれど、母さんがこの街で暮らし始めた頃には身よりも何もなかった。戸籍すらなかったので、早苗さんと同じ苗字を名乗るようになった。それで娘の私も東風谷を名乗るようになっている。そのあたりの事情は聞いたことがある。けれど、結局二人が出会った遠い場所とはどこなのか、母さんも早苗さんも教えてくれたことはなかった。
「――私のお父さんもそこにいるの？」
「……そうかもね」
　そう言って、母はわずかに目を伏せた。そんな目を見るのは今日二度目だ。
「教えてくれないのは私がまだ子供だから？」
「それは関係ないわ。分かる人には子供でも分かるし、理解できない人には大人でも理解できないんじゃない」
「……どうなったら教えてくれるのさ」
「その時が来れば、あなたの方で勝手に理解するわよ、きっと」
「そのときって？」
「自由に空を飛びたいと思ったことはある？」
「……あるけど」
　小学生なら誰だって思うだろう。ひみつ道具でも超能力でもなんでもいい。空が飛べれば、朝はもっとゆっくり寝ていられるし、好きなところに遊びに行ける。でも、人間は空を飛ぶようにできていないし、飛行機とかヘリコプターとか、空を

飛ぶための道具はすごくお金がかかるのだ。ポケットからすっと出てくるようなものではない。
「その場所ではね」
母さんは秘密めかした笑みを浮かべながら、着物の袖を抑えてカウンター越しに私の方に身を乗り出した。
「私は空が飛べたのよ」
「……嘘だ」
「それを信じるなら教えてあげる」
母さんはそう言ってくすくす笑っていた。結局、母にとって私はいつまでも子供のままなのだ。

「ゆーうーちゃーん」
夕食の片付けも終わり、ソファの上でテレビを見ていると、早苗さんがニコニコしながらこちらに寄ってきた。後ろに何か持っている。
「ちょっと付き合いませんか」
「……太るよ」
「だからはんぶんこしようと思って」
タコス味のチップスを何か秘密の宝物でも差し出すように捧げ持つ早苗さんを一瞥して、私は肩をすくめる。とは言いながらも、夜も更けたこの時間に食べるジャンクフードは格別だ。罪の味がする。私は平静を装いながら、共犯者特有の目くばせをして立ち上がった。
「……お茶入れてくる」
私が急須の中で茶葉を蒸らす間、早苗さんはローテーブルにチップスの袋を置いて大人しく座っていた。しかし、ウキウキしているのが背中でもわかる。こういうところはどこか子供っぽさが抜けない。
「ねぇ」
「はい？」
湯呑にお茶を注ぎながら、私はその背中に尋ねた。何の気もない風に聞こえることを願いつつ。
「今朝、母さんとキスしてたでしょ」
「あは……」
照れくさそうに笑いながら、早苗さんは肩越しに振り返る。
「見られてましたか」
「……別に。気にしてないけど」
半分だけ、嘘をついた。母さんと早苗さんとの関係に口を挟む気はない。それくらいは弁えているつもりだ。けれど、漠然とした不安がかき消えずに胸の中にある。自分が何者なのか。
「早苗さんは――なんで、その……」

その続きが、うまく言葉にならなかった。視線が、無意識のうちにリビングの壁を泳いでいた。二人の結婚写真。その隣に、広く開いていた場所がある。もう一枚、そこには写真がかかっていたはずだ。この街で暮らし始める前、「遠い場所」にいた頃の二人。母さんがそれを外してしまいこんでしまったのはいつだったか、思い出せなかった。

「……座りませんか」

私がローテーブルに湯呑を置き、ソファの隣に座ると、早苗さんはどこか天井の高いところを眺めながらゆっくりと口を開いた。遠いところのことを思い出しているのか、それともここにはいない誰かに話しかけているのか、そんな気がした。

「神様が引き合わせてくれたんですよ」

「……そういうの、いいから」

普段の早苗さんは余り信心深い方には見えないのに、たまにそういうことを口にする。リビングの棚の一番高いところに神棚があって、お札を祀ってあるのも今の家では少数派かもしれないが、奇異とまでは言えないだろう。もともと早苗さんの実家は、どこかの大きな神社だと聞いていたし、私もそう不思議に思うことはなかった。

「憧れの人だったんですよ、私にとって。強くて、元気で、みんなに好かれて――」

不服そうな私に気を害した風もなく、早苗さんはお茶を一口すると、続けた。

「――料理が上手で、お茶を入れるのも。そう考えると、今もそう変わりませんね」

「……結局ノロケじゃん」

私はソファの上で膝を抱える。こそばゆい感じはしたが、不思議と悪い気はしなかった。

「喧嘩とかしなかったの」

「ああ……初めて会ったときはそうでしたねぇ。バチバチでしたよ」

湯呑から立ち上る湯気を視線で追いながら、早苗さんは目を細めた。目尻に微かに皺が寄っている。

「でも私の負けでした。この人には敵わないんだなぁって、そんな気がして……それから、ずっと」

「その話、こないだも聞いた」

「そうでしたっけ？　私も歳ですねえ」

二人が出会った頃の話をする早苗さんの顔は、いつも穏やかで、幸せそうで――だからこそ、私には不思議だった。そうして幸せに過ごしていたはずなのに、どうして二人はその場所を離れなけ

ればならなかったのか。そう聞こうとする前に、早苗さんは続けた。
「だから、あなたが生まれた時も嬉しかったんですよ」
　早苗さんの手が、そっと私の頭を抱き寄せた。
「……いつのまにかこんなに大きくなっちゃいましたねえ」
「やめてよ」
　私はそう言いながらも、私の髪をすくように撫でる、暖かい手に頭を任せていた。スイッチを入れたばかりの電気ストーブのような、微かに金くさい匂い。油と金属の匂い。母さんとは違うけれど、懐かしい。母さんはもっと遠慮なく、わしゃわしゃと撫でてくる。
「奇跡って信じますか？」
「……求めても与えられるものではない、でしょ」
「そうです」
　半ば眠りにも似た心地よさのなかで、私はその声を聴いていた。その話をするときの早苗さんは、いつも神棚の方に顔を向けて、どこか遠いところを見ている。それはもしかしたら、二人がかつて過ごしていた世界なのかもしれない。
「沢山の可能性の中から何かを選ばなければいけないとしても、自分は一人ではなくて――もっと大きなものに見守られている。そう信じるきっかけとして、神様が与えてくれるんです」
　この人に触れられる時、私が時々感じる違和感の正体がようやくわかったような気がした。私がいることで、この人から大事な時間を奪ってしまったのかもしれない。それまでずっと二人でいたのに。あるいは、早苗さんも同じことを思っていたのだろうか。私から母さんを取り上げてしまったのかもしれない、と。
　血を分けた親子であっても、子供が親のすべてを占有するわけにはいかない。そのくらいの分別はつく年になっていた、そのつもりだ。だから、あなたがいて嬉しい、と言われたことが嬉しかった。
「……」
「えへへー」
　そしてそう言われて喜ぶくらいには、私はまだ子供だった。そういうことだろう。無言のままごろりと膝の上に頭を預けた私を、早苗さんは嬉しそうに見下ろしていた。
「……楽しそうね、あんたたち」

そして、にこやかに笑う早苗さんがテーブルの上に手を伸ばしかけた瞬間――別の手が、スナック菓子の袋を取り上げた。
「こんな時間に何やってるのかしら」
「れ、霊夢さん……？」
先ほどまでの和やかな空気はどこへやら。突然背後に現れた母さんと時計を見交わしながら、早苗さんはしどろもどろと言葉を詰まらせる。
「えっ、あの……お店は……」
「今日はもうお客さんいないから閉めた」
母は時々、そうやって足音も気配もなく現れることがある。私にも、母が二階に上がってくるのが全くつかめなかった。昔は空が飛べたというのもあながち嘘ではないのかもしれない。
「晩御飯が足りなかったかしら？」
「い、いいじゃないですかちょっとくらい……食べ盛りなんですし」
鼻息荒くドリトスの袋を取り上げる母に気おされてか、早苗さんが横目にこちらを見る。自分から食べようと言いだしたくせに小学生の私をダシにつかう、そういうところは本当にこずるいと思う。
「この子はいいの。あんたよあんた」
「ひゃんっ」

勿論、母がそんな子供の言い訳にほだされるはずもない。母の手が早苗さんの服の中に潜り込み、早苗さんは素っ頓狂な声を上げて背中をのけぞらせた。
「この！　おなか！」
「直に、直にはやめてくださいっ」
「今月また健康診断でしょ！　中性脂肪！　コレステロール！　血糖値！」
「あれだけ飲み食いしてて何ともない霊夢さんがおかしいんですよっ！　なんなんですかそのくびれ！　うらやましい！」
はぁ、と私はため息をつき、ソファの上に身を起こす。傍で聞いているだけでお腹いっぱいになりそうだ。
「……そういうの、私が見てないときにやって」
「あら、ごめん」
早苗さんとじゃれ合っていた母は、悪びれもせずに私の方を見て口角を持ち上げた。
「まだ歯磨いてないわよね？」

もう九時を回った。リビングで酒盛りを始めた二人を残して、私は歯を磨きに洗面所に向かう。別に気を利かせたとかそういうつもりもないけれど。余談ながら、母が早苗さんから取り上げたド

リトスは無残にもハムやレタスや削りたてのチーズと混ぜられ、手製のサルサと一緒に私たちの胃袋に収まった。母の料理の腕を疑う気はないが、朝から晩まで厨房に立ったあとでまだ何か作りたがるのは一種の病気ではないかと心配になることがある。あるいは、母なりのストレス解消なのかもしれない。仕事で漫画を描いている人が息抜きに落書きをするような。

洗面所のドアを閉めると、リビングから聞こえてくるざわめきが少し遠くなる。暗い鏡の中には私が映っている。鏡の中の私が髪に手を触れる。料理の腕以外で、私が一番母に似ていない部分。

母さんの髪は黒で（最近白髪が数本混じってきたが、母を怒らせたい時以外は指摘しないようにしている）、髪質も絹糸のようにまっすぐだ。早苗さんの髪は少しクセッ毛だが、同じく黒。でも光の加減によっては時々緑がかって見える、不思議な色をしている。私の髪色はもう少し薄い。金髪と茶色の中間のような色をしていて、微かにウェーブしている。亜麻色というのだと、早苗さんが教えてくれた。

きっと、まだ見たことのない、私のお父さんから遺伝したのだろう。自分の髪が嫌いというほどではなかったが、トラブルの種になることはあった。地毛か、と聞かれてそうだと答えるたびに親の話になり、そうなると私が父親を知らないことに言及せざるを得ない。そのたびに聞いた人が申し訳なさそうにするので、むしろこちらの方が罪悪感を覚えるようになった。私のことを知っている人は、もうだいたい話題にはしない。

黒く染めて、ストレートパーマをかけたらどうだ、と学校の先生に言われたことがある。中学に上がると地毛証明を求められたりなんだりと面倒になるから、という理由だ。家に帰って母にその話をしたら、母は店を閉めてその日のうちに学校に怒鳴り込んだ。私はその場に居合わせなかったので具体的なやりとりは知らないのだが、母の性格からしてそういう剣幕になったのは想像に難くない。

帰って来た時は、早苗さんが一緒だった。わざわざ仕事を早退して、先生との話し合いに同席したらしい。暴走しがちな母のなだめ役としてついていったのかといぶかる私に、母はどこか自慢げに言ったものだ。早苗を怒らせると私より怖いわよ、と。

家にいるときのおっとりした顔しか知らない私には、早苗さんが誰かのためであっても怒ってみせるなどということは想像もできなかった。

けど、私にお父さんがいたらきっとそうしてくれたと思う。